

平成四年

沼津市大平地区神社明細

前大平地区神社氏子総代連合会元会長 吉川武次郎

監修 鷺頭神社 宮司 勝又清
郷社 八幡神社

駿東郡清水町八幡三九

TEL 九七二一四九〇四

目

次

村社の部

一、鷲頭神社 天満 一
二、天神社(村社合祀社) 五

大平八社神の部

三、御嶽神社 小山 七
四、住吉大明神 住吉 七
五、八幡神社 西三分市 八
六、浅間神社 新城 九
七、湯屋権現 山口 九
八、白山権現 山口 一〇
九、山王権現 山口 一〇
一〇、白髭明神 吉田 一

内八社神の部

縁結神社 一四
一、諏訪大明神 政戸 一四
二、結大明神 政戸 一四
三、佐口神 政戸 一五
四、稻荷大明神 政戸 一五
五、木曾大明神 木ノ宮 一六
六、幡宮 政戸 一六
七、子ノ神 宮 一七
八、金山大権現 政戸 一七

諸社の部

一九、山ノ神社	政戸	……	一九	二〇、天形星皇牛頭天王	東三分市	……	一九
二一、月夜木大明神	御陵の木	……	二一	二二、阿波嶋大明神	住吉	……	二一
二三、牛頭天王	左口神	正一位稻荷大明神	東三分市	……	……	……	二四
二四、山神社	山口	……	二四	二五、子安社	小山	……	二五
二六、太子社	小山	……	二五	二七、牛頭天王	松下	……	二六
二八、山神社	横代	……	二六	二九、熊野神社	大井	……	二七
三〇、薬師様	大井	……	二七	三一、山神社	大井	……	二八
三二、稻荷社	大井	……	二八	三三、観音堂	大井	……	二九
三四、中将宮	御前帰	……	二九	三五、八幡社	御前帰	……	三〇
三六、第六天宮	御前帰	……	三一	三七、八幡社	戸ヶ谷	……	三一
三八、山神社	小踊	……	三一	三九、山神社	戸ヶ谷	……	三二
四〇、観音堂	戸ヶ谷	……	三三	四一、金刀比羅神社	多比口	……	三三
四二、龍音寺聖観世音	吉田	……	三四	四三、七面大明神	新城	……	三六
四四、大聖不動尊社	新城	……	三七	四五、天神宮	新城	……	三八
四六、山神社	山口	……	三八	四七、水神様	山口	……	三九
四八、山神社	多比口	……	三九	四九、山神社	吉田	……	四〇
五〇、山神社	南蔵	……	四〇	五一、稻荷社	南蔵	……	四一
五二、久須八幡宮	月ヶ洞	……	四二				

道祖神について 四五

一区 小山 四八

三区 御前埽、小踊、戸ヶ谷 四九

五区 南蔵、新城、政戸 五〇

七区 西三分市 五二

六区 東三分市南町、東三分市蓼沼 五一

二区 松下、横代、大井 四八

四区 天満、多比口、山口、吉田 四九

ドンド焼について 五三

資料 棟札 石灯笼 鳥居 五五

あとがき 五九

一 鷲頭神社

一、鎮座地

沼津市大平字天満一八二四番地 境内地一一〇坪 境外地五〇〇坪

標高三十三m山上 参道石段一四四段（四段階）

大正三年大洪水の節石段の八段目まで浸水した。

昭和二十年七月十七日夜の空襲による焼夷弾の跡数ヶ所あり。

奥宮 大平字鷲頭山三二五番地 （標高三九二m）

神地 九坪 境外地保安林約四万坪（鷲頭山三二五四番地）

山頂に石祠あり

二、御祭神 たかおかみのかみ 高[■]神

三、社格

十一等級 神社本庁被包括法人

元大平村村社 （合祀神社三社）

四、合祀神社

天神社 祭神 あめのほひのみこと 天穂日命 （平組守護）（御神体 水精石）〔四、九区〕

八幡社 祭神 ほんだわけのみこと 譽田別命 （東組守護）〔五、六、七、十、十一区〕

御嶽社 祭神 やまとたけるのみこと 日本武尊 （西組守護）〔一、二、三、八区〕

但、万延元年（一八六〇）十一月 八社神外八百万神合祀 明治八年（一八七五）九月大平各社合祀願出承認

五、祭日

大祭 十月十五日 小祭 二月十一日（祈年祭） 五月五日（皐月祭）

（現在大祭日十月十五日前後の最も近い日曜日）

六、例大祭供物

和稻（洗米）、荒稻（舂若くは玄米）、神酒、鏡餅、野鳥（卵）、海魚（金目鯛） 海菜（昆布・海苔・若芽等）、野菜、果物、塩、水、

* 参拝者に紅白の餅を供物として渡している。

* 小祭は左記に準ず

七、氏子組織

大平地区全域（一区より十一区）各年順番に当番区となり祭典準備その他担当する。

鷲頭神社氏子総代会主催で祭典執行。

余興、売店その他当番区自由委託。

大祭前日 前夜祭、花火打ち上げ、演芸大会、福引、大平ばやし、

大祭当日 午前九時 子供神輿清祓（拝殿前）祓いの後各部落巡幸

午前十時 例大祭

午後 子供相撲大会 売店等有り

八、備考（創建年沿革その他）

創建文明元年（一四六九）伊予の国より神主磯部伊予守随奉し移奉され、鷲頭山麓戸ヶ谷観音道横に鎮座し祀る。五穀豊穰と豊漁、海上安全の守護神として祀られ、靈験あらたかな為信仰深まり、清浄な地へ移奉することとなり、文明十三年（一四八一）鷲頭山頂へ神地を造成して遷宮した。水害や早魃の難を守らせ給う御神徳尊く、住民はもとより近隣静浦から

遠くは清水港地区に至るまで信仰厚く、参拝者は多い。

天正九年（一五八一）十月城主北條氏康の命により、社殿改築、神主屋敷も普請し、丁重に祀る。山火事も多かったので三人宛番人も置いた。

明暦二年（一六五六） 秋、若者共、夜人形操りを行い、豊作を祝う。（風祭り）

寛文十年（一六七〇） 豊年満作を祝い風祭りをして人形芝居を行う。

元禄七〜九年（一六九四〜六） 豊作。

元禄十六年（一七〇三） 祭礼の時、狂言を奉納し祝う。（元禄十五年より豊年満作の為）

宝永五年（一七〇八） 祭礼に狂言「傾城二子山第四番続」を行い祝う。

正徳二年（一七一二） 当番若者祭礼に人形操りを計画したが、將軍徳川家宣の死去により中止する。

享保八年（一七二三） 五月二十八日寺院方と小山道智（行者）百姓の頼みにより鷲頭山頂で雨乞いの祈祷を三日三夜行う。効果なく寺院方下山し、道智一人残り祈祷を続け雨をもたらず。

享保十一年（一七二六） 八月 小山、三分一若者祭礼に協力して狂言を行い、以後西組東組の百姓たち和解する。（以後も大蛇を造りかつぎ上げて雨ごいをした。）

寛保元年（一七四一） 祭礼に狂言を行う。「万歳和国之二人妻四番続」

延享二年（一七四五） 祭礼に狂言を行う。「乱後太平記四番続」。この夏旱魃にて雨乞い。

明和八年（一七七二） おかげ参り流行する。

安永三年（一七七四） 一月 祭礼に狂言を奉納する。

安永六年（一七七七） 前年十二月二十五日、三分一の大火にて三十軒余消失につき、祭礼の狂言中止となる。

安永八年（一七七九） 十一月四日獅子浜村より出火、飛び火して鷲頭山宮居残らず焼失。

安永九年（一七八〇） 社殿復興。

当時社殿は鷲頭山頂にあった。社地は「百間下り」と云われ、山頂より静浦側へ約百八十m下がったところまで氏子共有地として茅狩場になっていた。浜側にある素性のよい茅を得るため、毎年山焼きを行った。しかし海から吹き上げる風が強くと火を逃がすことも多かった。以後類焼の危険もあるため氏子中協議の結果、老幼男女の参拝の便宜もはかるため鷲頭山の端山でもある天満山に遷宮することとした。山頂には石祠を残し奥宮とすることにした。

万延元年（一八六〇）十一月、八社神、延喜式内社、天神地祇八百万神鎮座（棟札有）

明治七年（一八七四）現在地に社殿御造営遷座。山頂旧社殿跡には礎石等有

本殿、木造神明造平屋建銅板葺二・二坪 拝殿、木造切妻平屋建瓦葺 十坪

境内には大平七本松の一の松「昇竜之松」があった。

明治八年（一八七五）二月 村社に列格

五月 諸社合併（棟札有）

九月 承認

明治十六年（一八八三）四月九日 社殿造替（棟札有）

昭和六十年（一九八五）十月 拝殿屋根葺替

九、棟札 七十二枚（調査未済 鷲頭神社外諸社分有）

十、石灯籠 三基 天保八年（一八三七） 元治元年（一八六四） 慶応元年（一八六五）

十一、鳥居 石造 明治二十二年三月（一八八九）

二 天神社

(鷺頭神社に合祀)

一、鎮座地 鷺頭神社相殿

二、祭神名 天穂日命あめのほひのみこと 菅原道真

御神体 水精石(大養石)

四、氏子組織 村社と同じ、天満多比口天神講

五、備考(創建年沿革その他)

寛永三年(一六二六)社殿造営。

これより数百年前でいつの頃か明らかでないが、この地に不思議な石(水精石)があった。この石は年々育つといわれており、注連縄を張って祀っていた。山裾の住人古谷某の霊夢に現れて、社に祀ってもらいたいとお告げがあったため、村人と相談して造営することとなった。

この石は歳を振るにしたがって大きくなるので社も少しづつ大きくしていったと伝えられている。

「大平道之記」には「天満宮」と称し祀っていたという記事がある。

霊験あらたかな神で、現在も学業祈願する者が多い。地元天満、多比口地区では正月二十五日天神講を催して祀つ

ている。

この社前に大平七本松の内の一の松「昇龍之松」といわれた老松があったが、惜しいことに松食い虫の被害により枯れてしまった。年輪によれば樹齢七百五十年であった。村社遷宮の折りの整地により根元五尺ばかり埋まってしまったという。大きな柱が立っている感じだった。

大平八社神の部

この大平が開発されはじめた頃から祀られている。各地域の開発状況によりそれぞれ創建年代が異なるが、「大平年代記」大平道之記」などの文献によれば、古くは富南城が置かれた一一八六年に始まり、八社神の定められた一三八九年以前には各社とも創建されていたものと見て間違いはなからうと思われる。

康応元年（一三八九）八社神を定め村全体で祀ることとなり、祭祀は毎月三日に「八社神祭」と称して行われることになった。これまでは各集落毎に行われていた。

永享元年（一四二九）今川氏より許されて三分一引高分を八社神修復料にあて、翌二年より祭祀を東・西・平組の三組にて交代に行った。また禰宜も当番組より出された。

鷲頭神社創建以前は、この八社が大平の守護神であった。

中世今川支配の時には、鷲頭神社分を含め始め神領十五貫六百文、天文の頃には十五貫七百文であった。

天正十年（一五八二）八社神料召し上げられたため、各地区（三組）にて祭祀を行うこととなった。

近世にはいると、各地区にて祀るためその地域の産土神として意識され、氏子区域も細分化されて現在に至る。（中世末天正十四年（一五八六）大平村十五ヶ郷に改まった。）

祭礼は、八社神が定められた頃から近世始めまでは毎月三日に行われていたがいつの頃か鷲頭神社例祭に併せて行われるようになった。

尚、以下の神社は全て非法人である。

三 御嶽神社 (御嶽大権現)

- 一、鎮座地 大平字小山 子山の頂上
- 二、祭神名 日本武尊
- 三、村落名 大平字小山
- 四、祭日 九月十三日
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、塩、水
- 六、氏子組織 大平(一区)小山(東西合同)
- 七、備考(創建年沿革その他)
建武二年(一三三五)星屋修理亮(金子重郎)この地を開発し住居を定め氏神として祀りはじめる。
康応元年(一三八九)八社神として祀りはじめる。
この地に男山、女山、子山の三山あり。山三つ嶽を称して始め三嶽神社と称した。この里の名を元は「御山(オヤマ)」というが、後に書き誤って伝わり「小山」となり、現在の字名となる。
正長元年(一四二八)駿府屋形よりの「神事祭礼肝要」の命令あり。
永享元年(一四二九)三分一の引高が八社神の修復料

となる。

永享二年(一四三〇)八社神の禰宜・を東、西、南の三組より毎年交代で出し、祭礼を行う。
永正十一年(一五一四)八社神の修理を命令される。
大永元年(一五二一)御嶽権現造替

四 住吉大明神

- 一、鎮座地 大平字住吉
- 二、祭神名 うわつのおのみこと 表筒男命 なかつのおのみこと 中筒男命 そこつのおのみこと 底筒男命 じんぐうこうこう 神功皇后
- 三、村落名 大平字三分市
- 四、祭日 六月三十日 夏祭 十月十五日 秋祭
(毎月三日隣家で祀る)
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、果物、菓子、塩、水、
- 六、氏子組織 大平字三分市合同
- 七、備考(創建年沿革その他)
嘉慶二年(一三八八)六月三十日百姓の志願によりて祀

る。

康応元年（一三八九）大平八社神として改めて祀る。産業繁盛、海上安全、守護神として信仰あり。

大永三年（一五二三）社殿造替、盛大に祭典を齋行、露店なども多く並び賑やかであったが、いつとは無しに衰微した。

現在は、近隣の人たち毎月三日に供え物をして祀り、正月・十月に供餅その他を供えてお祭りをしている。

昭和六十二年（一九八七）参道復元 近年住吉地区居住者揃って住吉大社に参詣、信仰を深めている。

五 八幡神社

（正八幡宮）

一、鎮座地 大平西三分市字宮ノ木（大平中央公園）

二、祭神名 応神天皇 比売神 神功皇后

三、村落名 大平字三分市

四、祭日 九月十五日（旧八月十五日）・五月五日

・十月十五日・一月十五日

五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、果物、塩、水、

六、氏子組織 大平三分市（六・七区）東西三分市合同

七、備考（創元年沿革その他）

永和元年（一三七五）八月創建

康応元年（一三八九）大平八社神として祀る。

至徳二年（一三八五）二月二日同元年駿府領となりたる

ため、開発人片岡権之輔は今川国氏よりお墨付きを授けられ、開発地の三分の二を預け置かれ神社の修復に心するよう命ぜられる。

大永三年（一五二三）社殿造替

村社鷲頭神社の祭礼日には祭り幡を立て献灯などもして祭礼している。

明治二十七年（一八九四）日清、明治三十七年（一九〇

四）日露戦争時参詣者多く、戦捷祈願し盛大な祭りをした。

大正三年（一九一四）第一次世界大戦、昭和十六年（一

九四一）大東亜戦争中も昼夜参詣者多し。

昭和二十九年（一九五四）忠魂碑建立英霊八十七柱を祀る。

揮毫は大将宇垣一成。

毎年彼岸の中日に大平地区婦人会員参拝慰霊す。

六 浅間神社 (富士浅間宮)

- 一、鎮座地 大平字新城の円教寺裏山の富南城跡
- 二、祭神名 このはなさくぐみのみこと
木之花咲耶姫命
- 三、村落名 大平字新城及南蔵
- 四、祭日 十月十五日 (村社の祭典と同じ)
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、
塩、水、
- 六、氏子組織 大平字新城と南蔵合同
(昔は三分一南町も氏子)
- 七、備考 (創建年沿革その他)
文治二年 (一一八六) 富南城造営完成し、城の守護神として祀る。
康応元年 (一一三八九) 大平八社神に定め、毎月三日を祭礼日とする。
以後他の八社神と同様の扱いとなる。
当初は、城の鬼門除けの神として創建された。
大永六年 (一五二六) 北條の命により社殿を造営し盛大に祀る。

七 湯屋権現 (以下三社相殿)

- 一、鎮座地 大平字山口市部落上右側東向山
- 二、祭神名 おおよまづみのみこと
大山祇命
- 三、村落名 大平字山口 (昔は字新城、富南城内守護神)
- 四、祭日 十月十五日 (村社の祭典と同じ、
昔は毎月三日)
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、
塩、水、
- 六、氏子組織 大平字山口 (昔は新城、南蔵)
- 七、備考 (創建年沿革その他)
文治二年 (一一八六) 富南城守神として祀りはじめる。
康応二年 (一一三八九) 大平八社神として毎月三日祀る。
大永六年 (一五二六) 社殿造替

八 白山権現 しらやま

- 一、鎮座地
 - 二、祭神名 しらやまひめのみこと 白山比・命 くくりひめのみこと 菊理媛命
 - 三、村落名 大平字山口
 - 四、祭日 十月十五日（村社の祭典と同じ、昔は毎月三日）
 - 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、塩、水、
 - 六、氏子組織 大平字山口、天満、多比口、吉田（四区）
 - 七、備考（創建年沿革その他）
 康応二年（一三八九）大平八社神として毎月三日祀る。
 大永五年（一五二五）これまで水田中に祀ってあったが北條氏の命により、社殿を山口山の根付きへ造り替えて祀る。
- 今は元小学校奉安殿を現在地に移築して、白山、山王、湯屋の三権現を合祀している。三社はこの本殿内に並べて祀っている。

大平南組（後平組となる）の守護神として祭った。部落内二軒宛禰宜当番となり、毎月一日十五日に飯、塩、水を供えて代参している。

十月の秋祭りは、全部落一同で村社祭礼日にあわせて、三者同時に行う。

九 山王権現

- 一、鎮座地 大平字山口部落上右側東向山
- 二、祭神名 おおものぬしのみこと 大物主命 おおやまくいのみこと 大山咋命
- 三、村落名 大平字山口
- 四、祭日 十月十五日（村社の祭典と同じ、昔は毎月三日）
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、塩、水、
- 六、氏子組織 大平字山口、天満、多比口、吉田（四区）
- 七、備考（創建年沿革その他）

康応二年（一三八九）大平八社神として毎月三日祀る。

大永四年（一五二四）北條美濃守の命により、河中に祀つてあつたが、社殿を山口山の根付きへ造り替えて祀る。

大平南組（後平組となる）の守護神として祭つた。

部落内二軒宛一年交代で禰宜当番となり、毎月一日十五日に飯、塩、水を供えて代参している。

十月の秋祭りは、全部落一同で村社祭礼日にあわせて、三者同時に行う。

酒造の神という。昔は川の中州に祀つてあつたという。

十 白髭明神

一、鎮座地 大平字吉田山裾

二、祭神名 武内宿禰たけのうちのすくね（白比氣大神）

三、村落名 大平字吉田

四、祭日 十月十五日（村社の祭典と同じ、

昔は毎月三日）

五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字吉田

七、備考（創建年沿革その他）

康応二年（一三八九）大平八社神として祀る。

大永五年（一五二五）北條氏の命により、水田中より吉田山根付きへ社殿造営して祀る。

天正十七年（一五八九）八月八日より大雨降り続き十三日夜山崩れとなり、社殿、向岳庵人家、人馬とも二、三丈も埋まってしまった。その後西側の山の斜面に仮社殿を造営して祀る。

寛政九年（一六三二）この山臥雲寺と旦那方との争いになり、同十年終に召し上げられ公儀御林となった。「御庵上げ地」と称した。

元禄元年（一六八八）許されて向岳林として返還された。翌二年春より四年十一月まで向岳林伐採。吉田共有林として植栽、社殿を造営して祀る。

大正十二年（一九二三）九月一日地震にて倒壊したため鈴木家稻荷社北側へ石の祠として鎮座。以後同家にて毎月一日十五日に供物を供えて祀る。吉田では毎年村社例祭にあわせて祀る。

昭和五七年九月十二日吉田山の元の神地を含め四ヶ所崩れたので、現在尚鈴木家宅地の神地に祀っている。

内八社神の部

天正十六年（一五八八）春、小田原北條氏が敗れたため、その守城であった富南城も破却となった。城を守っていた武士は浪人となりこの政戸で農業を営むようになった。「大平年代記」によれば、

「同十六年戊子春 御城・諸道具ホ御払物ニ相成申候。此年・城者破却いたし候而此時・関内ニ同心衆色々之払物をし、田畑ヲ買求メ置候而住居し候方六七人も、又ハ九人茂相見へ申候（後略）」とあり、同十八年（一五九〇）の条に、

「（前略）此秋八月正戸浪人百姓衆鎮守ヲ造榮し而、是ヲ内八社神とス。・内八社神者・結大明神 諏訪大明神 木曾大明神・佐口神 八幡宮 稲荷大明神・金山大権現 子之神宮也」とある。

元は、旧来の部落の外側にできたため、従来からの八社神にたいして「外八社神」として祀りはじめた。しかし、外者という感が否めないで、政戸の内輪の守護神という意味から「内八社神」として祀るようになったとの伝承がある。

尚、諏訪大明神、結大明神、佐口神、稲荷大明神は、政戸バス停前一所一殿に祀られており、「縁結神社」と称し殿内中央に諏訪大明神と結大明神、向かって右側に稲荷大明神、左側に佐口神を祀っている。

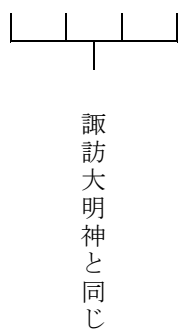
以下四社 「縁結神社」 として相殿に祀る

十一 諏訪大明神

- 一、鎮座地 大平字政戸バス停前
- 二、祭神名 たけみなかたのみこと 建御名方命 やさかとのめのみこと 八坂刀売命
- 三、村落名 大平字政戸
- 四、祭日 九月九日（現在は九月一日）
当番渡しの日（風祭り）
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、
塩、水、
- 六、氏子組織 大平字政戸部落住民
- 七、備考（創建年沿革その他）
天正十八年（一五九〇）八月創建

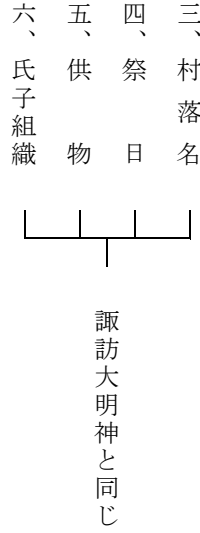
十一 結大明神 (結神社)

- 一、鎮座地 大平字政戸バス停前
- 二、祭神名 いざなみのみこと 伊弉諾尊 いざなみのみこと 伊弉册尊
- 三、村落名
- 四、祭日
- 五、供物
- 六、氏子組織
- 七、備考（創建年沿革その他）
天正十八年（一五九〇）八月創建
明治九年（一八七六）合併神籬
明治十二年（一八七九）現在地に遷宮
明治十九年（一八八六）一月九日 四社合祀する。



十三 佐口神 さこうじん

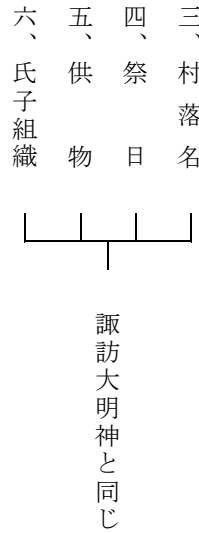
- 一、鎮座地 大平字政戸バス停前
- 二、祭神名 (おしやもじさん)



- 三、村落名
- 四、祭日
- 五、供物
- 六、氏子組織
- 七、備考 (創建年沿革その他)
天正十八年 (一五九〇) 八月創建
明治十九年 (一八八六) 一月九日 四社合祀する。
天然痘などの皮膚病の神という (佐久神ニシヤグジ・サゴジか?)

十四 稻荷大明神 (天白大権現)

- 一、鎮座地 大平字政戸バス停前
- 二、祭神名 うがのみたまのかみ 倉稻魂神 さくたひこ 作田比古



- 三、村落名
- 四、祭日
- 五、供物
- 六、氏子組織
- 七、備考 (創建年沿革その他)
天正十八年 (一五九〇) 八月創建
明和三年 (一七六六) 十二月二十七日社殿修理
天白稻荷大明神性子鎮座
天明五年 (一七八五) 社殿改修、大平舞台の地
明治十九年 (一八八六) 一月九日 四社合祀する。
農業の守護神として祀る。

十五 木曾大明神（木ノ宮大明神）

- 一、鎮座地 大平字木ノ宮
狩野川大平堤防起点の山裾
- 二、祭神名 木ノ宮大神
- 三、村落名 大平字政戸
- 四、祭日 九月九日（現在は九月一日）
当番渡しの日（風祭り）
- 五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、
塩、水、
- 六、氏子組織 大平字政戸部落住民
- 七、備考（創建年沿革その他）
天正十八年（一五九〇）八月創建
宝暦十年（一七六〇）正月改修
慶応二年（一八六六）六月社殿石段など修復
大正六年（一九一七）二月七日社扉修復

十六 八幡宮（八幡大神）

- 一、鎮座地 大平字政戸 稲村知弘宅裏山
- 二、祭神名 応神天皇 合祀 左 金比羅宮大神
右 菅原大神（芭蕉天神）
- 三、村落名 大平字政戸
- 四、祭日 八月十五日一月十五日（毎月一日十五日）
- 五、供物 洗米、鏡餅、魚、野菜、果物、塩、水、
（毎月個人でご飯）
- 六、氏子組織 大平字政戸部落住民
- 七、備考（創建年沿革その他）
天正十八年（一五九〇）八月創建
嘉永元年（一八四八）八月十五日稲村伊兵衛、修理して
祀る。
明治二十二年（一八八九）一月九日現在地社殿造営遷宮、
稲村伊平、齋主を三島神社宮司秋山光條に依頼
現在毎年九月一日に内八社神を一括して政戸部落にて祀
る。

十七 子ノ神宮(甲子様)

一、鎮座地 大平字政戸 金崎光雄鉄工場宅地続き裏山

二、祭神名 甲子大国主大神

三、村落名 大平字政戸

四、祭日 正月甲子の日 毎月一日十五日

五、供物 洗米、鏡餅、果物、塩、水、
(毎月一日十五日御飯)

六、氏子組織 大平字政戸部落住民

(現在 金崎稲村両家にて祀る)

七、備考(創建年沿革その他)

天正十八年(一五九〇)八月創建

嘉永二年(一八四九)正月、稲村安藏、(金崎と改姓)

修復、神主実相院快龍祈祷して祀る。

大正十二年(一九二三)二月、金崎安太郎修復

昭和五十六年(一九八一)一月 社殿鉄骨造にて改修。

十八 金山大権現

一、鎮座地 大平字政戸 七面山南側斜面山裾
(元小金山山頂)

二、祭神名 金山太神

三、村落名 大平字政戸

四、祭日 九月九日(現在九月一日)

風祭り当日(当番渡しの日)

五、供物 洗米、鏡餅、野菜、果物、塩、水、

六、氏子組織 大平字政戸部落住民

七、備考(創建年沿革その他)

天正十八年(一五九〇)八月創建

大平を囲む形の連山東端の七面山続きに離れて小山があった。昔は金山といわれ、この山に朝日が射すと草木の露に光り映えて、黄金色に輝き花が咲いたように見えるので「こがね山」「小金山」と現在までいわれ字名となっている。
この山頂に大平七本松といわれた「小金松」といわれる

大木があった。その下に金山権現を祀ってあったが、現在は、この山を全部崩して鉄工場敷地となっている。鉱山関係の守護神を祀った山の跡地が、鉄工場になっているのも何か因果関係を思わせる。

昔は、この山裾を洗って狩野川が廻っていたという。川をはさんだ向こう側の塚本には、守山という独立小山がある。これも大平連山の延長と思われる。

諸社の部

十九 山ノ神社

一、鎮座地 大平字政戸 七面山東端山東向き斜面

政戸共有林内

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字政戸

四、祭日 正月五月九月各十七日

五、供物 洗米、供え餅、塩、水、

(昔は、洗米の粉で力モチという団子を

三個作って供えた。)

六、氏子組織 大平字政戸部落住民

七、備考(創建年沿革その他)

明応元年(一四九二)物見の山といわれたこの山に祀る。

明治三年(一八七〇)十二月稲村伊兵衛、原弥衛門の両

名、横代の石工儀兵衛に頼み、石祠を造り祀る。

二十 天形星皇牛頭天王

てんぎょうせいおおごづてんのう

(通称 てんのうさん)

一、鎮座地 大平東三分市二一〇二一

二、祭神名 素戔鳴尊すさのおのみこと

(ムスビノミヤ)

三、村落名 大平字東三分市

四、祭日 七月十三日

五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 東西両三分市合同

七、備考(創建年沿革その他)

天明四年（一七八四）五月吉日、葦山北条の天王様を分祀する。

その頃天明の飢饉があり、気候不順で凶作続きのため栄養失調による病気が発生、大流行して死人が続々と出て村民は大変苦しんだ。天明七年（一七八七）には全国各地に米一揆が起こったほどである。北条の天王さんが、夏神ではやり病にも霊験があらたかであると伝え聞き、神主に頼んで分祀したと謂う。村民一同一生懸命祈り、漸く疾病も治まった。これはありがたい神さまだという事で信仰するようになり、盛大なお祭りをするようになった。

毎年七月七日を「御涼み（おすずみ）」といい、外に祭殿を造る。屋根は麦藁葺き、三方の囲い壁も同じく麦幹で粗く囲う。（現在は、屋根はその上をビニールで覆う。）

十三日が本祭りで昼夜行う。昼間は子供神輿が出て部落内を廻る。

昔は山車を引き廻し、「シャギリ太鼓、踊り等あり」

「屯所」に集まり酒宴を開き、夜は演芸、田舎芝居等、道路には露店が並ぶ。盛大な祭りが行われ、大平中の人々が集まる。

疫病除けの神である。

万延元年（一八六〇）祠と外屋を新造する。（大工長谷川安太郎）

昭和二年までの屯所は、現在の北側の土地にあり、茅葺き木造平屋で二十一坪あった。

昭和三年、現在の場所に青年倶楽部を建築し、併せて地主の許可を得て天王様をこの一角に夏の間出して祀るようになった。この建物は当時の青年の労力奉仕により、共有山より檜を切り出し建築したものである。水害時に逃げ遅れた人たちの避難所を兼ね、集会所として三分市が使用していた。終戦後はしばらく使わなかったが、大平自治会で借り受け、改修して大平幼稚園の第二教室として使用、現在は六区の集会所及び、老人憩いの家として利用している。現在の祭は、六区、七区が交代で当番となり行われている。

九月風祭りまでの間、三夜別に氏子寄「おちようねん」する。六区、七区の女衆が経文を唱えて祈る。子供たちにも菓子などを配る。

経文 おんころずいしやあー ござてんのう

せいがんずいしやあー えんめいそわかー

屯所の押入の「長持」の中には、神楽の衣装や、鳥の羽

根などが入っていた。前項に「シャギリ太鼓、踊り等あり」とあるように当社にも舞曲が伝わっていたらしい。大阪天王寺に伝わるといわれるものを以下に記す。

笛三人、鼓四人、太鼓一人（古老）

「まくり」鼓四、太鼓一。乱調の意味を持ち、打ち合わす。序曲である。

▪ 「やつはち」（八初児）羯鼓かっこを前につけ、撥ぼちを持った二人が打ちながら舞う。

▪ 「みこまい」

▪ 「鶴」二人が覆面に鶴の頭をつけ、背の舞羽に両手の指をかけて、広げたりたたんだりして鶴の飛ぶさまを模して舞う可愛らしい舞である。

▪ 「しし」獅子の頭をつけて稚児二人が舞う。

▪ 「かりようびん」（迦陵頻）女面をかぶり、うしろに尾羽をつけて一人で舞う。

▪ 「りゆう」龍頭を頭上にかぶり、二人で舞う。二本の柱に逆さにぶら下がり、上体をそらしたりして龍のうねる様子をする。

▪ 「たうろう」蟠螂舞で一人が覆面をして、かまきりの形

をしたものを頭上にかぶり、背に舞羽をつけて舞う。

▪ 「うでんじし」うでんという山男が獅子と大格闘をして退治し、悪者を平らげて平和郷をつくる意味の舞。

▪ 「やつはち」序四の繰り返し。

二十一 月夜木大明神

（御陵ノ宮 月野木大明神）

一、鎮座地 大平字御陵ノ木

二、祭神名 北条右衛門太夫父子

（富南城主の廟所・霊之宮）

三、村落名 大平字東三分市

四、祭日 正・五・九月 年三回

五、供物 洗米、神酒、供餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字新城、南蔵、正戸、三分一

七、備考（創元年沿革その他）

文亀三年（一五〇三）富南城主北条父子の霊を祀り、霊

之宮とする。

正中二年（一三二五）三月鎌倉よりわけあり、北条右衛門太夫殿伊豆に流され、大平富南城御屋形小河原兵部、田中軍藏に預けられ、この城に籠め置かれた。田方庄五百町を領されて、天晴の殿様と尊崇されていた。

応安四年（一三七一）四月三日病死、六日葬送、この地に埋葬され榎を植えた。子息後を嗣ぎ五月右衛門太夫となる。後死亡したとき又ここに埋葬した。

榎は成木した後「御霊ノ木」といわれ、大木となった。後に畑作の障りとなったため伐り倒されたが、村方に「たたり」が起こつて疾病絶えず、人々恐れをなしてそのまま捨てておいた。しかしこの木がだんだん朽ちてきて月夜木となり、丁度夜毎に月が出たごとく夜な夜な光りだし、増す増す「たたり」が多くなった。特に民家の女子供に「たたり」、村方相談して社を建てて慰霊する事になった。

文亀三年（一五〇三）「霊之宮」として創建、年三回祀る。これより「たたり」は納まると伝えられる。

慶長十九年（一六〇四）春、徳川頼宣領となり、改めて「月夜木明神」と崇め祀る。それを誤り「月野木明神」といわれた。（大平道ノ記）

その後いつの頃か、この埋蔵物を掘り出そうとする者があつたが、忽ち発熱して首曲がりとなつてしまった。それ以来村人恐れて近寄る者もなく、樹木茂りて夕暮れ時には鼻など鳴き不気味だつたと言ひ伝えられている。社もいつしか失われてしまった。又、この近くを作る者も次々と災難に遭うため、耕作を止めてしまった。

大東亜戦争中、食料増産のため開墾し、神地は五分の一位となり、わずかに旧跡を止めている。この地域は字名を「御陵ノ木」という。護国のための開墾には「たたり」は無しか、今はそのことを聞かない。

現在は、表作を稲、裏作を苺を作り無駄なく利用されている。

二十二 阿波嶋大明神

（あわしまさん）

- 一、鎮座地 大平字住吉 三分市中央南北道沿い
- 二、祭神名 初花姫命はつはなひめのみこと（天照大神の妹）

三、村落名 大平字東三分市

四、祭 日 三月三日 (別に毎月都合の良い日の夜

当 番制で「あわしまこう」を開く)

五、供 物 元旦・三月三日 洗米、供餅、塩、水、

果物、菓子、

毎月の祭 ご飯、菓子など

六、氏子組織 大平全域「あわしまこう」

七、備考(創建年沿革その他)

永和元年(一三七五)春三月、安産の守護神として祀りはじめ。

昭和四十九年(一九七四)十二月、蓼沼に住む大工の場和三郎宮大工の技あり、社殿建築し、寄進する。妻梅九十歳(昭和六十三年)健在。霊験を実証している。

昭和五十七年(一九八二)同氏長男父の遺志を継ぎ、社殿朱色塗装を寄進する。

女の守護神として信仰篤し。信仰する者大平地区全域に及び、現在も婦人会の常会を利用して、毎月夜お祈りして祀っている。

唱え言葉

まえおき

紀州草なぎ阿波嶋大明神 われたのむ人の歩みすくい
給わば世の阿波嶋を神と奉るべし。

わさん

きみようちようらい いせの国 伊勢大神宮の妹に

初花姫と申せしは 十三才の明けの春 三月桜の花盛り

女の役目を発明して やしろをけがしたその罪で うつ

ろの船にのせられて き州やぎさに流されて きしゅう

やぎさの中郷で 阿波嶋様と申せしは どんな きかた

のやまいでも なほしてやるとの御成願 なむ大師へん

じようそん。

ごえいか

今日は花 明日は月かな熱田川 変わるわが身を知らぬ

おろそか。

大平旧部落 小山、(松下、横代)、大井、御前帰、小

踊、戸ヶ谷、(天満、多比口)、山口、吉田、(南蔵、新

城)、政戸、南町、蓼沼、(北村、西町、住吉、宮ノ木)

以上各部落、○内は合同、他は単独に毎月婦人会で現在

は茶菓を接待。昔はあわしま講とって、ふるまいをして

いた。

二十三 牛頭天王 左口神

正一位稻荷大明神

一、鎮座地 大平字三分市二一〇〇一三

椋の老大木の元にある。この椋は目通り直径一米余り、現在残る大平一の古木である。樹齡三一五年

二、祭神名 素戔鳴尊 佐口神 佐田彦神

三、村落名 大平字東三分市

四、祭日 七月十三日（別に毎月一日十五日）

五、供物 洗米、神酒、餅、塩、水、野菜、果物、

六、氏子組織 大平字東三分市南町並

原一統（毎月一日十五日は原一統）

七、備考（創建年沿革その他）

元和三年（一六一七）大風により、御前帰丸山より原宮内の屋敷まで棟札が吹き飛ばされてきた。訳あることと屋

敷鎮守として正一位稻荷大明神、左口神とともに祀りはじめる。

稻荷・左口両神は、文禄三年（一五九四）十二月よりこの地に住居を定めたときから祀る。武田氏の家臣であった原宮内は以後改名し、三分市良左衛門と称し土着した。

（現在の当主は原武雄

氏）

二十四 山神社

一、鎮座地 大平字山口山共有林

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字東三分市、南、東、西、住吉、

四、祭日 正・五・九月各十七日

五、供物 神酒、餅、魚、野菜、果物、塩、水、

六、氏子組織 力餅団子（洗米をすりつぶし団子とする
大平字三分市、南町、蓼沼、西三分市、

それぞれ講を開き祀る。

七、備考（創建年沿革その他）

永享三年（一四三一）祠を造り祀る。三分市合同。

承応二年（一六五三）八月、台風により破損甚だしく、

九月祠改修する。

正徳三年（一七一三）山ノ神の大松盗伐され争いとなる。

この時まで戸ヶ谷山に祀ってあったが、この事件で移築、

山口山洞へ勧請。

享保六年（一七二一）十一月、前項の事件和尚の仲裁で

八年ぶりに龍音寺にて和睦の相談決まり、解決する。

現在も尚祭礼には、弓矢を作り鬼門に放って厄払い行事

を行う。また講を開き力餅を各人に配って食べる。若者の

祭りなり。

昔は、飯を山盛りに揃えて食べたという。今はない。

二十五 子安社

一、鎮座地 大平字小山 子山裾

二、祭神名 子持地藏尊

三、村落名 大平字小山

四、祭日 三月・九月彼岸

五、供物 飯、茶、菓子、果物、

六、氏子組織 大平字小山全域女

七、備考（創建年沿革その他）

康応元年（一三八九）三月祭りはじめる。

小山全区女念仏堂に集まり、念仏を唱えて祀る。

現在は小山区公会堂に女集まり念仏を唱え、茶菓で親睦

を深める。

二十六 太子社（おたいしさん）

一、鎮座地 大平字小山 慈雲院境内

二、祭神名 聖徳太子

三、村落名 大平字小山

四、祭日 四月三日

五、供物 洗米、神酒、鏡餅、果物、菓子、塩、水、

六、氏子組織 大平全地区各種職人

七、備考（創建年沿革その他）

創祀未詳。

明治の頃より太子講を開き祀る。当時大平産の石材は有名で多く産出され、職人も非常に多かった。この職人が社を建立して盛大に祀ったものである。

二十七 牛頭天王

合祀 第六天

一、鎮座地 大平字松下、横代境山裾

二、祭神名 素戔鳴命

三、村落名 大平字松下

四、祭日 六月三十日 七月一日

五、供物 洗米、神酒、鏡餅、果物、塩、水、

六、氏子組織 大平字松下・横代合同

七、備考（創建年沿革その他）

永享八年（一四三六）夏創祀。前年春より疾病流行し、死人多く出たため祀り始めたという。

現在風祭りとともに祀っている。第六天も同時に祀る。

大平七本松の内「天王松」がある。

尚、慈雲院墓所の東南隅に石仏がある。昭和二十年までここに松の太木があり、昔は通行する人がここで一息入れたという。享保の頃の露滴という人の句が石に刻まれている。

涼しさは 汗ともしらず 松の下

二十八 山神社

一、鎮座地 大平字横代

二、祭神名 天王社の西側の石段を上った山の上

三、村落名 大山祇命

四、祭日 大平字横代

五、供物 正・五・九月各十七日

六、氏子組織 洗米、神酒、供餅、塩、水、

七、備考（創建年沿革その他）

永享三年（一四三一）分祀。小踊先小山に祀つてある西

祀。

組総山神社の分祀である。

昔は、山の神講を開き、正・五・九月の十七日に盛大に祀っていたが、今は正月十七日に簡素に祀っているのとこのと。

二十九 熊野神社

- 一、鎮座地 大平字大井山、志下坂上り口右側の山
- 二、祭神名 熊野権現 櫛御氣野命くしみけのみこと
- 三、村落名 大平字大井
- 四、祭日 九月九日（現在は日曜日、昔は一月九日）
- 五、供物 洗米、神酒、供餅、野菜、果物、塩、水、
- 六、氏子組織 大平字大井部落一同
- 七、備考（創建年沿革その他）
元暦元年（一一八四）北條氏、関を大平に置いた頃より祀ったという。

文治元年（一一八五）三位中将重衡の子、この地に病死

したので土地の人々葬送、ここに埋葬して児の御前の墓として合祀し供養したという。

参拝すると諸願よく感応ありといわれ、慶長元和の頃より神社として社殿を造り祀ったという伝承がある。

現在九月の当番渡しの日に祀っている。

三十 薬師様

（おやくしさん）

- 一、鎮座地 大平字大井 桃源院境内
- 二、祭神名 東方薬師如来
- 三、村落名 大平字大井
- 四、祭日 正・五・九月各十二日 縁日
- 五、供物 御飯、供餅、茶、菓子、果物、水、
- 六、氏子組織 大平全地区女衆
- 七、備考（創建年沿革その他）
享徳元年（一四五二）創建、近江の国より移され安置されたという。

昔から災害や病気から守ってくれる衆患悉除の神仏とい

う。神徳篤く多くの信者がある。

昭和六十一年（一九八六）一月、後藤忠行氏の寄進により桃源院本堂南側へ改築造営す。

大平七本松の内七の松「臥龍の松」、この桃源院山門傍らにあったが、昭和五十七年（一九八二）松食虫のため枯れる。

三十一 山神社

一、鎮座地 大平字大井山、志下坂上り口右側の山

熊野神社北側

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字大井

四、祭日 正・五・九月各十七日

五、供物 洗米、神酒、供餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字大井部落一同

七、備考（創建年沿革その他）

永享三年（一四三一）分祀。小踊先小山に祀つてある西組総山神社の分祀である。

大東亜戦争前までは各家順番で山の神講を開き、若者に振舞いとして洗米を鉢ですって力団子を作り、神前に供えた後、食前にさげて廻し食いをして祝ったという。

また、丸竹で弓矢を作り鬼門に放つて厄払いをした。現在この行事はない。

三十一 稻荷社

一、鎮座地 大平字大井山、志下坂上り口右側の山

熊野神社南側

二、祭神名 正一位稻荷大明神 佐田彦神

三、村落名 大平字大井

四、祭日 二月初午の日

五、供物 赤飯、神酒、油揚げ、魚、五色紙幡

六、氏子組織 大平字大井部落一同

七、備考（創建年沿革その他）

永和元年（一三七五）初午より祀る。
産業の紙として豊作を祈る。

三十三 観音堂

- 一、鎮座地 大平字大井 野田利貞氏隣岩山自然石洞窟
- 二、祭神名 観世音菩薩
- 三、村落名 大平字大井
- 四、祭日 三月彼岸
- 五、供物 御飯、水
- 六、氏子組織 大平字大井部落一同
- 七、備考（創建年沿革その他）

創建未詳

寛永八年（一六三一）三月、寛保三年（一七四三）祈願
などあり。

三十四 中将宮（通称 中将様）

（八幡宮 併祀）

- 一、鎮座地 大平字御前帰山岩窟（中将岩下）
ぼたもち峠南入る
- 二、祭神名 三位中将平重衡靈廟
- 三、村落名 大平字御前帰
- 四、祭日 四月三日
- 五、供物 洗米、神酒、餅、魚、野菜、果物、
菓子、塩、水、
- 六、氏子組織 大平字御前帰、小踊合同
- 七、備考（創建年沿革その他）
文明十四年（一四八二）洞窟に祠を造り祀る。また、姫
の心を慰めるため石像を建立する。この年よりこの地大平
の領分となる。

文明十五年（一四八二）八幡宮併せ祀る。

大平地域は、平家源氏両氏の落ち武者それぞれ隠れ住み、
定住して開発した土地である。源平互いに手を取り合い協
力しあつた証據である。

文治元年（一一八五）海路を逃れた平家の三位中将平重

衡は、駿河國静浦の浜から上陸し、山に入って鷲頭山中腹の大岩の下の洞窟に隠れていたが、ついに発覚し、我が命運これまでとこの大岩の上にて切腹した。村人は浜の石を持ってこの場所を敷き詰め清めた。現在もその痕跡あり。

戦火を避けていた中將の奥方と姫は、中將が駿河にあると聞きはるばる尋ね来て大平の里に至り、その無事を聞き小踊りして喜び合ったという。「小踊」という地名の起りである。

更に進み山に入らんとした時、あわれにも中將切腹の悲報に接し、奥方は強い衝撃に倒れ数日村人宅に身を臥せ、ついに中將の亡骸とも会えず帰ったという。御前の帰った処という意味で「御前帰」と呼び、左手の山を逢わずの山と称した。後になまって「ごぜがえり」というようになつたと伝えられる。

なお、気丈な姫は、山に上り洞窟にいたり、中將の遺骸と涙の対面をし、父中將の洞窟生活や最後を思い嘆き悲しんだ。

村人は中將の霊と姫の心情を慰めるため、洞窟に石像を建立した。

この大岩を「中將岩」と呼んでいる。

なお、この境内には大正天皇が皇太子時代この山に登り、自らお植えになられたお手植えの松の大きな木がある。

平重衡（一一五七—一一八五）源平時代の武将。平清盛の男。保元二年生。従三位左今衛権中將。

明石にて源氏に捕えられ、頼朝と面謁した折り「弓馬に携る者敵の為捕へらるるは強ち恥辱にあらず、■く斬罪に處せらるべし」と答え大いに感動さす。頼朝は彼を篤く遇した。

しかし平家のためその罪は免れず、元暦二年六月二十三日奈良木津川畔にて斬首。時に享年二十九歳。

（日本人名大事典より 抜粋要

約）

三十五 八幡社

一、鎮座地 大平字御前帰部落西側山斜面東向

二、祭神名 応神天皇

三、村落名 大平字御前帰

四、祭日 九月一日 昔は八月十五日

五、供物 洗米、神酒、■餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字御前帰、小踊合同

七、備考（創建年沿革その他）

永享元年（一四二九）祠を造り祀る。

永享元年（一四二九）八幡宮と一緒に祀る。

三十七 八幡社

一、鎮座地 大平字戸ヶ谷山

戸ヶ谷共有林（鷲頭登山道右側）

二、祭神名 譽田別命

三、村落名 大平字戸ヶ谷

四、祭日 八月十五日

五、供物 洗米、神酒、供餅、塩、水、

六、氏子組織 大平字戸ヶ谷部落

七、備考（創建年沿革その他）

元徳元年（一三二九）創祀

文明十三年（一四八一）祠改修

現在九月に当番渡しが行われる。

三十六 第六天宮

一、鎮座地 大平字御前帰部落西側山斜面東向

二、祭神名 おもだるのみこと 面足尊 かしこねのみこと 惶根尊

三、村落名 大平字御前帰

四、祭日 九月一日 昔は八月十五日

五、供物 洗米、神酒、■餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字御前帰、小踊合同

七、備考（創建年沿革その他）

三十八 山神社

一、鎮座地 大平字小踊先小山の頂上

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字小踊

四、祭日 正・五・九月各十七日

(現在は九月第一日曜日)

五、供物 洗米、神酒、鏡餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字小踊、御前婦

七、備考(創建年沿革その他)

永享三年(一四三一)大平西組総山ノ神として祀り始める。

昔は若者が「山の神講」といい、各戸順番に宿をして飲食をした。夜祭りを行った。

三十九 山神社

一、鎮座地 大平字戸ヶ谷部落山の上

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字戸ヶ谷

四、祭日 正・五・九月各十七日

五、供物 洗米、神酒、餅、塩、水、

六、氏子組織 大平字戸ヶ谷部落

七、備考(創建年沿革その他)

永享三年(一四三一)創祀と伝えられる。

正徳三年(一七一三)より戸ヶ谷部落民祀り始める。

各家順番に当番をして山ノ神講を開いて祀った。

現在は当番の家が、正・五・九月各十七日御飯と神酒を供えて祀る。(大東亜戦争後)

四〇 観音堂

- 一、鎮座地 大平字戸ケ谷 徳楽寺境内
- 二、祭神名 聖如意輪観世音菩薩（行基の作）
- 三、村落名 大平字戸ケ谷
- 四、祭日 五月三日 毎月観音講にて老女など集まり、各部落別に祀る。
- 五、供物 洗米、供餅、塩、水、
- 六、氏子組織 大平全地域
- 七、備考（創元年沿革その他）
創祀未詳、往古この地に円成寺という寺があった。本尊として祀ってあったが、応永三年（一三九六）火災のため焼失した。本尊のこの観世音菩薩は裏山に堂を建てて祀った。（ここを堂返しという）
文明二年（一四六九）現在地に返し、堂を建てて祀る。
この仏像は、沼津市の文化財に指定されている。仏像体内に「行基作」と明記されており、沼津歴史資料館に展示されたこともある。
大平地区は観音信仰篤く、各部落で現在も毎月観音講を

開き祀っている。

また、江戸時代より横道三十三ヶ所札所の九番で参詣者が多い。

なお、ここに入る参道右側の堂脇西側に大きな石仏がある。

四十一 金刀比羅神社

- 一、鎮座地 大平字多比口山洞
静浦多比に通ずる道の左側の山
- 二、祭神名 大物主命
- 三、村落名 大平字多比口
- 四、祭日 四月十日
- 五、供物 洗米、神酒、供餅、魚、野菜、果物、菓子、塩、水、
- 六、氏子組織 多比口、天満部落（昔は原家中屋の鎮守で個人で祀っていた。）

七、備考（創建年沿革その他）

創祀未詳

長保三年（一〇〇一）頃、岩山洞窟に祀り始めたといわれている。

原家興隆の頃より盛大に祭るようになり、山の中腹にありながら出店も並び鬮鶏などもあった。道路添には祭り幡を立て、参拝者には紅白の菓子を配るなど、大平全域より集まる程の祭りであった。

現在は多比口、天満部落でわずかに祭っている。

四十二 龍音寺聖観世音

一、鎮座地 大平字吉田 龍音寺

二、祭神名 聖観世音菩薩

三、村落名 大平字吉田

四、祭日 五月三日

五、供物 供餅、団子、果物、菓子、水、

六、氏子組織 大平地域全般

七、備考（創建年沿革その他）

明徳元年（一三九〇）覚翁という僧が来たり、この地に雲のように眺められる巨岩が露出しているのを見て、庵室結び本尊に阿弥陀如来を安置した。

明徳三年（一三九二）覚翁坊死去す。依ってこれを覚翁庵という。

応永四年（一三九七）覚翁庵の庭の大岩、苔白く雲の渡るに似ているので、石雲庵と改称す。

永享八年（一四三六）春より疾病流行、多くの人死亡。

永享十年（一四三八）石雲庵へ寄り集まって百万遍修行、漸く納まる。

翌十一年（一四三九）三分市で阿弥陀堂を建てる相談が決まる。

翌十二年（一四四〇）寺田に建立し、百万遍修行を行う。（現在保育所の南側、石碑のある場所。ここは後に学校の始めとなる大平舎ができる。）

嘉吉元年（一四四一）大平村と称するようになった。一反三六〇坪が三〇〇坪に改められる。

覚翁坊死後は一一八年間石雲庵は無住であった。その間のいつの頃か未詳であるが、旅の僧観音像を背負って来た

り一夜の宿をかりた。翌朝出発しようと観音像を背負ったところ腰が抜けて立ち上がることができなかった。降ろしたところ何事もなかったので再び背負って立ち上がろうとしたが、又腰が抜けて立つことができなかった。旅の僧は神罰と恐れ観音像をそのまま残して逃げ去ったという。村人はこれを石雲庵に祀り祈願したところ靈験があるので、百万遍念仏もここに集まって祈願するようになったという伝承がある。

永正七年（一五一〇）桃源院二世越溪和尚再建。石雲山龍音寺と称し住職となる。観音像を正式に龍音寺で祀るようになったのはこの時からである。石雲庵にそれ以前から祀ってあったのは確かであろう。

永正八年（一五一一）興国寺伊勢の守殿（北條早雲）より銀五十枚づつ毎年贈られるようになった。桃源院の末寺であったための供養なり。

龍音寺の開山は以上の記録のように越溪麟易和尚、本尊は聖観世音菩薩となっている。

元禄十一年（一六九八）九月十一日の火災で本堂焼失、本尊の観音像は背負い出されて無事であった。

大正十二年（一九三二）九月一日午前十一時五十八分の

大地震（七・九）に南側の石山の大きな大岩落下して本堂を損傷するも、本尊は無事。

昭和五年（一九三〇）十一月二十六日午前四時二分伊豆大地震に再び大岩転落、本堂隅を破損したが幸い本尊は無事であった。

翌六年の失火により、防火水の用意なく本堂も類焼したが、大平消防団の助けにより山口の古木寿松氏命がけて背負い出し、観音像を無事救出した。

昭和四十九年（一九七四）七月七日の七夕豪雨で本堂裏山が崩れ落ちたが、この時も無事であった。

昭和五十一年（一九七六）十二月、しばらくの間桃源院の兼務で無住であったが、館和典和尚住職として着任す。

村人の話により観音像の古きを知り、檀家とも相談して国立文化財研究所久野健氏や、奈良の仏像鑑定家宝田信彦氏に鑑定を依頼。天平、弘仁、貞観時代の形式が像の各部にみられる珍しい作品であり、文化財としての価値が高いことがわかった。しかし虫食い状態が進行しており、このまま放置すれば二十年前後で壊れてしまう、修理は可能だと診断された。

そこで市教委文化財係、檀徒、地区関係者に事情を訴え、

協力を要請、篤志者もあつて、先ず防火装置を施し、後に藤本仏師の修復するところとなつた。

立像等身大立観音（沼津市文化財呼称）除幕式、観世音菩薩開眼入魂法要は盛大に行われた。

一本の樞の木を彫刻したもので腰部わずかに木心をくり抜き、乾割を防除してある。台座は時代が異なるが、完全なものならば国宝級のものであるとのこと。

観音様の信仰は篤く、大平地域各部落で観音講を開き、毎月祀っている。

この龍音寺山門北西に樹齡七百年余りの老松があつた。大平七本松の内二の松と呼ばれていたが、松食い虫のため枯れた。

四十三 七面大明神

一、鎮座地 大平字新城七面山頂 旧富南城見張所

二、祭神名 七面天女

三、村落名 大平字新城

四、祭日 四月十八日 午前十一時

五、供物 五色餅、神酒、海草、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平地域全般

七、備考（創建年沿革その他）

寛正三年（一四六二）二月、円城寺本尊観音施主ありて山之頂ニ御堂を建而遷シ祭ル。と「大平年代記」にあり。

七面堂の前身か。

元和三年（一六一七）岩山に洞窟あり。山頂なれど常時水の絶えることなく、龍神が住むと不思議がられて祀るようになったという。

寛永元年（一六二四）三月、お万の方大平星屋へ逗留の折り、七面山へ登り参詣したと伝えられ、使用した食器など円教寺に保存されている。玉沢妙法華寺参詣に事寄せ吉奈の湯に行く途中、少女の頃育てられた星屋家に来たものである。

明治廿四年（一八九一）十月十二日社殿を木造瓦葺きに改築する。この社殿は現在もある。敷地は新城の浅香世民氏の寄進によるものであり、大工は三島町の富岡梅吉氏であつた。

以後盛大な祭りをし、露店も沢山出たり子供相撲などの余興もあり、参道数ヶ所に祭り幡を立て遠くからもよくわかったという。大平地区のみならず他村からも参詣者が多かったという。

岩窟の池は、これを清掃し汲み出すと必ず雨が降り、元通りの水となったので益々信仰を深めた。雨乞いのたびにこうして雨を降らせて喜んだとの事。

現在も円教寺主体となり、檀家数軒宛て順番に当番をして祭りをする。

この七面様へ登る山道右側山上に赤松の老木あり。「傘松（からかさまつ）」「七面天女松」とも呼ばれていた。大平七本松の内三の松という。現在は松食い虫のため枯れて無い。根株のみとなっているが、松脂強く赤脂になっている。

四十四 大聖不動尊社

一、鎮座地 大平字新城 円教寺東南の富南城跡へ

登る山道右側へ祀る。

二、祭神名 不動明王

三、村落名 大平字新城

四、祭日 毎月七日 現在は毎月の当番の家の

都合のよい日曜日の夜

五、供物 茶飯、神酒、果物、菓子、塩、水、等

正月には供餅を供える。

六、氏子組織 大平字南蔵、新城、

昔は三分一村も一緒に祀った。

七、備考（創建年沿革その他）

創建は未詳なるも、永和元年（一三七五）以前より祀つてあつたと云われている。

享保十七年（一七三二）五月吉日、獻燈あり。

寛保二年（一七四二）四月二十八日、原喜太夫重治銘あり。

寛延四年（一七五一）八月吉日、三分一村造営の不動尊

銘石あり。

明治の頃まで三分一と新城、南蔵は合併していて不動講を開いていた。正月は必ず大山不動尊に代表者が参拝して、吉凶占い（筒粥）を受けてきた。昭和の始め頃まで、各部

落に別れて不動講をするようになっても続いていた。

山裾に堂宇あり、村人集まり豊作祈願や風祭りなどをした。

四十五 天神宮

鬼子母神、八幡大菩薩 合祀

一、鎮座地 大平字新城 富南城跡 東北隅

二、祭神名 正一位芭蕉天神

三、村落名 大平字新城

四、祭日 毎月 不動講と同時に祀る。

五、供物 茶飯、洗米、神酒、果物、菓子、塩、

水、等 正月には餅を供える。

六、氏子組織 大平字南蔵、新城、政戸部落合同。

七、備考（創建年沿革その他）

安政六年（一八五九）正月二十五日勸請、円教寺廿五世

日宣祈願による大願成就、新城村渡辺政吉

明治十九年（一八八六）一月十五日、願主渡辺政吉

昭和十年（一九三五）五月二十一日、宮大工の場和三郎
本殿改築。

男の病氣に対しての守神と云われ、綾部良作の祈願による石灯籠の奉納あり。

毎月天神講を開き順番に当番となり祀っている。

毎年代表者は、本宮へ祈願料を持参して参詣している。

四十六 山神社

一、鎮座地 大平字山口山登り口右側東向き斜面

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字山口

四、祭日 正・五・九月各十七日

五、供物 洗米、神酒、供餅、力団子、魚、野菜、

果物、塩、水、

六、氏子組織 大平字山口部落一同。

七、備考（創建年沿革その他）

永享三年（一四三一）創祀

部落内当番を順番に行い、山の神講を開き祀る。

洗米を鉢ですりつぶして作った団子を力餅と云い、神前に供えたあと下げて持ち帰り、宴席で廻し食いをして力が出るように祈る。また弓矢を作って鬼門に矢を放ち、厄払いをする神事あり。若者の祭り。

四十七 水神様 (辨天宮)

一、鎮座地 大平字古池南東隅湧水地

二、祭神名 龍神 弁財天

三、村落名 大平字山口

四、祭日 四月三日

五、供物 洗米、神酒、供餅、果物、菓子、塩、水、

六、氏子組織 大平字山口、天満、多比口、吉田、

各部落合同。

七、備考 (創建年沿革その他)

延宝五年(一六七七)春、山口洞山裾に築堤、溜池を造りその端に祀る。

元禄十六年(一七〇三)正月、今までの池は水保ち悪く、山口部落西側に新しく築堤して大池を造る。中央に島を造り遷して祀る。

大正七年(一九一八)耕地整理により池をつぶし改田としたため、島もなくなり字大塚堤防上に祀る。菅田に灌漑揚水場あり、電力揚水用に改造したため記念として遷して祀る。

その後五、六年間山口部落に災害や若死にするもの多く、水神を遷したためと誰いうとなく噂となり、区民相談の上元の場所に戻す事になり、現在地にて祀るようになった。

四十八 山神社

一、鎮座地 大平字多比口、天満共有林

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字多比口、天満

四、祭 日 正・五・九月各十七日

五、供 物 洗米、神酒、供餅、力餅、魚、野菜、

果物、塩、水、

六、氏子組織 大平字多比口、天満部落一同

七、備考（創元年沿革その他）

康応元年（一三八九）創祀

両部落内順番に当番となり、宿をして山の神講を開き祀る。

洗米を鉢ですりつぶして作った団子を力餅と云い、神前に供えたあと下げてきて、宴席で廻し食いをして力をつける。また弓矢を作つて鬼門に矢を放ち、厄払いをするなど行事あり。

四十九 山神社

一、鎮 座 地 大平字吉田山共有林

二、祭 神 名 大山祇命

三、村 落 名 大平字吉田

四、祭 日 正・五・九月各十七日

五、供 物 洗米、神酒、供餅、力餅、魚、野菜、

果物、塩、水、

六、氏子組織 大平字吉田部落一同

七、備考（創元年沿革その他）

康応元年（一三八九）創祀

順番に当番となり、山の神講を開き祀る。

大東亜戦争前は、洗米にて力団子をつくり、神前に供えたあと下げてきて、宴席で廻し食いをしたが今は行われな

い。また弓矢の行事も今は中止している。

昭和五七年（一九八二）九月十二日、台風十八号によりこの吉田山四ヶ所崩れる。この神地も崩れ祠も押し出されたので、山裾の庚申堂へ遷して祀っている。天正十九年（二五八九）にも山崩れがあり向岳庵など埋まった事がある。この山は急斜面のため危険である。

五十 山神社

一、鎮座地 大平字南蔵山西向斜面

二、祭神名 大山祇命

三、村落名 大平字南蔵、新城

四、祭日 正・五・九月各十七日

五、供物 洗米、神酒、供餅、魚、野菜、果物、

塩、水、

六、氏子組織 大平字南蔵、新城部落共同

七、備考（創建年沿革その他）

康応元年（一三八九）創祀

部落住民順番に当番宿となり、山の神講を開き祀る。現在も続いている。

応永十六年（一四〇九）同十七年と早魃続き、田畑は荒れ果てた。そこで行者を頼み、江尻橋付近で百日間の祈禱を行い、雨乞いをしたところ降ってきたので大喜びし、この修験者を江尻に当光庵、南蔵庵を造りその後数十年間住まわせた。

後に南蔵坊と呼ばれた。

ここに不動明王を祀る。現在これは浅間神社登り口の坂中途右側に祀ってある。部落民毎月不動講を順番に当番をして祀っている。

大平地区には全域にこの不動講があり、各戸順番で当番となり、夜間宴を開き祀っていたが、戦後簡単にする部落もあるが大部分は続けている。ほとんどは山の神と併せて祀っている。

五十一 稻荷社

一、鎮座地 大平字南蔵山西向斜面

山神社と並べて祀る。

二、祭神名 うかのみたまのかみ 倉稻魂神（別名保食神）

三、村落名 大平字南蔵

四、祭日 二月初午の日

五、供物（供餅は特別正月）赤飯、神酒、魚、油揚げ、

六、氏子組織 大平字南蔵住人、

新城綾部家で現在祀っている。

七、備考（創建年沿革その他）

元文四年（一七三九）道心坊法仙建立し祀る。

宝永六年（一七〇九）六月二十日南蔵加左衛門、里とい
う女を殺害、自殺する。

元文四年（一七三九）南蔵三左衛門後家に狐がとりつき、
日蓮宗道心坊法仙祈念する。狐後家を通して申すに、子細
ありて山の神に社を取り上げられ宿無し狐となる。元の社
地に帰参して稲荷となりたくても、今の狐の身では社も建
立なり難し。依ってこの後家にとりつきこの訳を申す。取
り持つてくれれば当村の繁栄を守護すると。法仙これによ
り祀る。

近郷の者噂を聞き参詣盛んになる。

翌五年、このこと伊豆、相模まで知れ渡り参詣盛んにな
るも、諸国の疱瘡、この春より当村にも流行。後家を通し
てなおるといわれた当村の子供どもも皆亡くなつてしまつ
たので、参詣者も少なくなり、すたれてしまったという。

（大平年代記よ

り）

五十二 久須八幡宮

一、鎮座地 大平字月ヶ洞入口右側の南面山の上（五
米）

二、祭神名 応神天皇

三、村落名 大平字月ヶ洞

四、祭日 四月十五日

五、供物 洗米、神酒、供餅、魚、野菜、果物、
塩、水、

六、氏子組織 大平字月ヶ洞 原一統

七、備考（創建年沿革その他）

桃源院が管理している。（この寺の七世宗虎和尚は、甲
州武田二十四将原加賀守の弟原宗吉である。）

天正十一年創祀。原加賀の守の縁者四人が桃源院を頼り、
逃れ来て住み着き守神として祀りはじめたものである。

古伝に葛巻山麓に八幡宮を祀りて「久須八幡宮」と称す。
事を始めるに当って靈験があらたかであると謂われてい
る。

大平の神社は以上のように数多くあるも、現在まで続いて盛大にお祭りを行っている神社はつぎの通りである。

- 元村社 鷲頭神社（合祀 天神社、八幡社、御嶽社）
 - 大平八社神 御嶽神社、正八幡神社、浅間神社、湯屋権現、白山権現、山王権現、白髭明神
 - 内八社神 諏訪大明神、結大明神、佐口神、天白稻荷大明神、木曾大明神（木ノ宮社） 八幡宮、子ノ神（甲子様）
- 金山大権現
- 三分市 天王様、御前婦 中将様、松下 天王様、大井 熊野神社
 - 新城 円教寺の七面様、吉田 龍音寺の聖観世音菩薩、大井 桃源院の薬師様、
 - 大平 ▪ 部落で祀っているもの
- 山神社（山の神講、不動講）
- 阿波嶋社（あわしま講女）（観音講 老女）

道祖神について

「道祖神」という名称は、中国「道教」のもので、道行く人の無事息災を守る神である。

「サエノカミ」は、日本独特の名称であるが、同一視されるようになった。「奈良時代の皇子に「道祖王」という方があり、「フナドノオオキミ」と読んだ。道祖神を「フナト」「フナド」「クナトノカミ」などと呼ぶ」

同一視された理由は、性質の類似性、共通性があるためで両者が混同され、本来の「サエノカミ」より「道祖神」の方が一般的になった。また、氏子の願望により、様々な事を祈る神となった。

道祖神の内単神の像を刻んであるものは、主に厄除、除災招福のため祀られる。（裾野より南部に多い）

双神の場合は、旅人の交通安全と、殖産、厄除、招福などを含めて、夫婦和合、子孫繁栄をあらわしている。主として、裾野より北部にある。御殿場には夫婦和合を現す男女神で、胸部と股間に手をのばして抱き合っている像もある。

また、神社としては、御殿場市大堰中丸の美乃和神社（高根神社）などがある。ここの祭神は、八衢大神（やちまたのおおかみ）といわれている。この祭神は八衢大神（やちまたのおおかみ）で道饗祝詞（みちあえののりと）には道祖神とされている。（街祖神、道陸神、道禄神、道六神、道勤義神、道福神）

道祖神の祭神は、「八衢彦・八衢姫」と呼ばれる男女二神で「くなど（勿来⇨来る勿れ）」という意味をもっている。

「岐神」「久那斗神」ともいう。「猿田彦神」の場合もある。

古事記では黄泉（よみ）の国に女神が行ってしまったので、追って行った男神が「ヨモツイクサ」に負われて辛うじて逃げ帰ったその出口に据えたのが「千曳磐」という。そしてここで「来る勿れ」と言ったので「勿来」と言われるようになった。クナドとは、その属する地域集団の生活空間と他勢力（物的、霊的、その他あらゆる勢力）空間と接する場所の事であ

る。仏教伝来以後「地藏」もその性格をもつので、集落ので入り口周辺の路傍に、同じ様な意味合いで建てられるようになつた。現在では、路傍の「地藏」はその性格からもつと多くの神徳を付せられて祀られている。

大平の方言「サエアーノカミサン」は、「賽の神」「幸の神」「さえのかみ」と言われているものである。いづれもその部落の入り口の道ばたに一つの石で像を刻んである。年号の刻んであるものは、東三分市南町の吉川宅地続きの揚水路上にある一体だけである。

静岡県下では、寛文十二年（一六七二）九月のものが小山町にあり、これが判明しているものの最古のものであるという。大平は、元暦元年（一六七二）北條四郎時政が新城の円教寺裏山へ関を造ったのが始めて、文治二年（一一八六）にはその関に小城を築いて遠山民部を城主にしている記録がある。住民は、このころから住み始めたのではなからうか。

大平に本格的に百姓が住み始めたのは、大平年代記によれば、正慶元年（一三三二）星屋修理亮主従四人により田畑の開墾が始まり、四〇年後の応安五年（一三七二）には、人口も二十三軒二七〇人となる。

大平の「サエノカミ」も早ければ関の作られた十二世紀、遅くも開拓の始まった十五世紀ごろから祀り始めたのではなからうか。当時の人たちが頼れるのは神さまだけであった。永享八年（一四三六）疫病が大流行して困り、三分市に阿弥陀堂（後の大平舎の位置）を建てて百万遍念仏を行い、文明元年（一四六九）には大旱魃や大出水に格別な靈験のある鷲頭明神を頼んだのも、このことからであろう。

大平で最も古い道祖神は、東三分市南町の吉川家屋敷続きの揚水路上に一枚石の橋を渡して、その上に祀っている二体内の古い方がそれである。ここには享保十八年（一七三三）以前からあったものと思われる七面山の石を使った卵形の一寸五寸（五〇cm）くらいのものがあった。その後吉田山（龍音寺南の山）の石が堅くて風化しないので、この石で作った像が現在残っている小さい方の頭のない像である。これは元文四年（一七三七）に前のものが古くなり形だけになったため、造り替えられたもので重さは一六〇kgある。前の像は、毎年正月十四日ドンドド焼の場所へ運び焼いていたらしい。これはいつの頃かなくなつて今はない。

元は道の南側丁字路の角にあり、間伐材運搬のたび毎にこすったり甚だしいときは転がしたりして困っていた。そのころ頭がとれたものと思われる。大正六年（一九一八）東部耕地整理の時セメントで丸い石を頭としてつけたが、すべすべしたところへ同じ様な材質の玉石だったのですぐにとれてしまった。

大きい方の「さえのかみ」は昭和三年（一九二八）四月吉川岩吉氏が、病弱であったが信心のため丈夫になり還暦を迎える事ができた喜びを、報恩感謝して七面山の石をもって彫刻し、現在地に入魂して祀ったものである。

昔は正月十四日、氏が経文をあげてお祭りをした。菓子や果物、団子などを供物として子供たちに分け与えてお祭りをした。現在は七月下旬より八月にかけて一週間毎に一晚三回南町の人（主に女）が、その前にむしろを敷いて経文をあげてお祭りをする。お果たしの日には、当番がご馳走を作って供え、子供たちにもたくさん菓子や果物、団子などお供物として与えている。

ドンド焼も正月十四日に行っているが「さえのかみ」を焼くことはしなくなった。言い伝えでは、悪病神がこの地区内の病気にさせる人の帳面を、この「さえのかみ」に預けてあるので、その帳面を「さえのかみ」と一緒に焼いてわからなくさせ、病人を出さないようにするためであるという。

また、書き初めをこの火に投じ、それが燃えながら空に昇ると書道の手が上がるともいう。そのほか、燃え残りの竹をもつてきて家の入り口に立てて置くと病人が出ないとか、その火で焼いた団子を食べると風邪をひかないとか、虫歯にならないなどの言い伝えもある。

さえのかみの経文

「おんぼ、こんぼ、てだらし、てんだらし、ごじそわかー、」

口伝で残っている経文で、どこの言葉かわからない。灯明や線香、花など供えるので神仏混淆である。

なお、大平では、子供の種痘の際、「ホーソー神さま」を祀る。青竹を割って粗く細縄で編み、ホウソウ棚を作る。大黒柱の二m位の高さにとりつける。疱瘡がよくつくと、その子供をたらいの中に座らせて頭へ「サンダワラ」をかぶせて、お

水を柳の枝につけてふりかける。また「ホウソウ団子（甘いあんを入れた小さな饅頭で、上に紅を指で丸くつける）」を供える。終わると「サンダワラ」に棚をのせ「さえのかみ」に納める。昭和五十二年頃まではよく見たが、最近は見られる程度であまり見かけなくなった。

大平地区には、現在十五体残っているが、旧部落は十七あるのであと二部落については今後の調査を待ちたい。

一区

小山（おやま） 清水町出城山境の道路西側の少し高台に観音堂がある。その北側に他の石像物と並んで、二体の丸彫り像がある。

向かって左側の像は、笏を持っている。右側の像は、手に宝珠をのせているので仏像らしく見える。道祖神の中には桃や宝珠を持っているものもあり、風化も進んでいるので速やかな調査を待ちたい。

二区

横代（よこじろ）横代天王様を横にみて廻ったところに白隠禅師の筆になる石碑がある。その向かって左に東部が折れてないが笏を持った浮彫座像がある。白隠禅師は度々大平に逗留したので、その筆跡は大分残されている。

大井（おおい）志下坂道入口左側の噴水泉の傍に、単神浮彫像がある。台石にははつきりと道祖神と彫られている。笏は短く両手の指をつけて持っているが、笏尾は手の下に出ていない。笏に峯ができていて、また法衣をきて頭巾をかぶっている。

三区

御前帰（ごぜがえり）池田工務店裏の畑の中の塚のような土饅頭の上に丸彫像がある。小作りだが、笏を持ち、頭巾をかぶっている。ドンドン焼きをここでするらしく黒々と跡が残っている。

小踊（こうどり）鴻鳥と書くのが正しい。山裾に切石でつくった十段ほどの階段があり、その上にやはり切石でつくった祠がある。その中に丸彫像がある。両手を組んだ手の上に宝珠をのせた仏像のような形である。頭髪はおかっぱ形で胴細である。祠前には石像の線香立てが備えてある。

戸ヶ谷（とがや）部落入口の丁字路の北側に、富士山を背景にして丸彫神像が二体ある。左側の方が大きい。頭巾も大きく腰のあたりまで垂れている。篤い笏を持った腕の上には深い穴ができている。右側のは少し小さい。頭部がなく持っている笏も痛んでいる。度々火中で焼かれたようである。

「思いきや 谷の戸深き 柴の屋を 誰が言いそめし 殿ヶ谷とは」（戸ヶ谷の地名由来）

四区

天満（てんま）この小山の上には大平元村社鷲頭神社と天満天神などが祀ってある。そのためこの地名がある。山を背にした東向きに丸彫神像がある。大平では一番大きい。頭を失った小さいものと二体並んでいる。大きい方は、大黒頭巾風のものをかぶり、両手を重ねて笏を持っている。鼻の大きいのも特徴である。小さい方も笏を持っている。曳車が今も残っているのは珍しい。このすぐ北側に天神様に登る石段が残っている。

山口（やまぐち）公会堂広場入口の北側にある。肉髻（にくけい）のように頭巾がこんもりしている。左上に笏を持ち肩は撫で肩である。目鼻が痛んでいるがよい面相である。両足を前で合わせる拝み足になっており珍しい。台は自然石

で神像と一体である。以前は古い建物の軒先くらいのところにあつたが、これを取り除き移設したものである。

吉田（よしだ）丸彫の座像。山沢の上に石橋を渡して安置。頭巾をかぶった顔は風化しているが、よく見るとほんわかとした暖かみが湧いてくるようだ。両手に持っているものは笏ではない。何か他のものを持っているらしいが判然としない。昔は道の端でここが吉田の入口だったが、今日ではむしろ奥といえる場所だ。

五区

南蔵（なんぞう）部落の真中になっているが、昔は南蔵に入るのには、円教寺西側の道を通った。ここが入口だったのである。下り坂の真中で西をむいている。前後が道だった。丸彫像である。頭巾は腰のあたりまであり、笏は右手に持っているが手より上の部分はかけている。ここは昔のまゝの位置にあり、ドンド焼は昭和四十年頃までやっていたが今はない。

夏の土用前に三々五晩、近所の女が集まって経文を唱え、夏の疾病を防ぐよう祈念している。三月にまたがってはいけないという言い伝えがあるので、八月末にお果たしのお祭りをする。

新城（しんじょう）沼津原木線の浅香氏前の待避場（道が狭いため車のすれ違い場所）から東へはいる道の角に、二体の丸彫神像がある。笏は形がわからなくなっているが右手に持っていたことがわかる。頭巾は肩より下まで垂れている。顔はやゝうつむいてしおらしい感じだ。袂は小さく筒袖に近い。頭頂には穴があいていて、子供たちが草もちをついていたことが伺える。左側は、胴から上が失われている。台石とも一個の石で、大きな石で造ったことがわかる。

政戸（まさど）昔は正戸と書いた。函南町日守（昔は水満里一みまり一いつも水がついているところからついた地名）と

の境で、三方を山に囲まれ前方は狩野川で、大平の全景を小さくしたような所である。富南場の守りの要衝であったのでこの地名がついたという。この地を開発居住したのは稲村一統で、内八社神はこの部落に祀っており、神社の一番多いところでもある。山づたいに吉田、山口、戸ヶ谷あたりまでと交流したので南組と呼ばれた。後に平組となり大平と合併した。

「さえのかみ」は部落の前の蓮沼の中の道路の真中に昔はあった。正月十四日のドンド焼も、神像を中にして正月飾りの小屋を造りそのまま焼いていた。後に道路工事があり、現在は道の端へ遷して祀っている。浮彫座像で左手に笏をもっており、袂は短く先がとがっている。頭巾をかぶっているが短く肩先で終わっている。この場所で七月下旬から八月にかけて、夏の疫病がないよう経文を唱えて祈願し、終わりにお果しはたをする。また子供たちに菓子なども与える。余所からやってくる災厄を防ぐため道の真中に祀ってあったが、今は道でのドンド焼もできなくなったので道路改修にあわせて道の端に祀っている。ドンド焼は別の田圃中の危険のないところでやっている。

また部落北の三叉路近くに諏訪神社ほか三社あるが、「縁結神社」と称している。この中に結神社があるところからの命名であろう。

六区

東三分市南町（ひがしさんぶいちみなみちょう）総論に記した通り三分市東南入口の藤原肉店と吉川家の間の東部揚水路上に、石橋を渡したその上に安置してある。昔は吉川家より東には家がなかったのでここに置かれた。

この地は昔狩野川の中州であった。度々の出水に上流から土が流れ込み段々と埋まって高くなり、耕作が可能となった。向原といわれ、山沿いに住む人たちが船で間の沼を渡り出作し、小屋掛けをした。応安三年（一三七〇）漸次広くなり人も住み始め戸数も増えてきたが、度々の出水で収穫も安定しなかったため上納米は他の三分の一に免ぜられた。依ってこの場所は三分一と呼ばれた。その後狩野川堤も安定し、人も多数住み始め大平各地への通行の便もよかったの

で、物資の集散地となり市場も立ち繁盛するようになったので、「一」を「市」とするようになったと伝えられる。往時は、石ヶ崎（今の小泉魚店）前より役場（今の保育所）まで道路の中央に二列の敷石が並べてあった。大平の中心地として交通の便をはかり、経済活動の促進をはかるためのものであった。

東三分市蓼沼（ひがしさんぶいちたでぬま）大平小学校東側の十字路の北側に、富士を背にして南向きに二体ある。丸彫像で頭巾が肩を覆っており、顔つきは風化してわからない。向かって右側の方は少し小さく頭がかけており、変わりに丸い平形の石をのせてある。笏も持っている。昔はこの道はなく、丁字路で直進道路の東側の道ばたに西向きになっていたが、昭和十八年（一九四三）の道路工事により、現在の所に祀るようになった。そのとき右側の神像の頭に笠石をのせた。

七区

西三分市（にしさんぶいち）現在の場所は北村町（きたむらちよう）字住吉の南西角、小針商店（大黒屋）角に祀ってある。童顔童形で愛くるしい神像である。笏を持つ指先は伸ばしたままであるから、持つというよりも抱いているような格好である。瞑目している。直衣（のうし）の襟もくつきりと出ている。頭頂も肉髻形で大平でよく見る型である。この部落でも七月から八月にかけて女衆が集まり、経文を唱えて祀り、子供に供物を与えることは、三分市共通である。ドンド焼は田圃中、堤防、河原など人家の■い危険のないところを選んで、正月十四日にやっている。

ドンド焼について

昔は「オンベ竹」といって、太い根付の青竹を笹をつけたまま立て、縄で支線を張り、それに古だるまをつけて飾りたて、その根元へ正月飾りをあつめて小屋をつくり子供たちは寝泊まりをした。また他の部落のお飾りを盗みっこしてけんかをしたり、お飾り小屋を城にして戦争ごっこをして遊んだものである。武器は青竹を自分で細工して機関銃や刀、槍などをつくった。

大平には良い竹藪が多くあり、富士郡以東浮島、原、片浜、柳原、静浦方面より、遠くのは未明の二時頃から「オンベ竹」直径十cm（尺竹）以上のものを買いにきた。おとなもついているが大勢の子供がかついで「ウンヨーカンヨー、ウンヨーカンヨー」とかけ声も勇ましく運んでいったものだ。

「大屋舗」字名由来

現在大平小学校所在地の一区画の字名で、建武元年（一三三四）上野国片岡郡より、片岡権之輔来たりて居を構え住み始めた。この一画を耕作しておったことによりこの地名となる。

資料

棟札 鷲頭神社内陣

一、正面内陣神祠内 (四枚) 丸石八個有

1 万延元年(一八六〇)十一月

天之御中主神

月夜見神

表 天照大御神 鎮魂八柱大神

須佐之男神

國之常立神

奉招禱伊豆國蛭筒小嶋神主眞木大和正藤原朝臣直虎

裏 萬延元年申霜月之月立之日

鷲頭神社神主磯右近藤原信央之代

2 明治八年(一八七五)五月

表 奉齋鷲頭神社・神・

祭主

裏 明治八年五月 楊原神社兼祠堂

・田信親

意富加牟須見神

須勢理毘賣神

大穴牟遲神

天兒屋根神

天太玉神

少名毘古那神

・田毘古那神

道反大神 船戸神

三千一百三十二座神

稻荷大神

神直日神 大直日神

就鳥頭大神 宮御鎮座

伊豆能賣神

竈地祇八百萬神

天神

3 年月日不詳 裏記載無し

伊邪奈伎神

高淤加美神

大山津見神

御鎮座

4 明治十六年（一八八三）四月九日

表

奉齋

高・神
伊邪那岐神
大山・神

裏

文明十三辛 丑年十一月十八日勸請明治八年九月合社願・之上字天満江遷座ス
就鳥頭神社

祭主

明治十六年四月九日神殿建築

楊原神社祠官
兼務
・田信親

二、正面内陣正中後（一枚）

5 明治十六年（一八八三）四月九日

合併村社

駿河國駿東郡
大平邨
戸長

表 就鳥頭神社

明治十餘年四月九日

神殿建築

主 任者 淺香世民
石工 綾部傳十郎
大工 野田儀平
祭主 原龜吉
向笠竹次郎
祠官 楊原神社
高田信親

山口	白山神社	三分一北	住吉神社
御前歸	第六天神社	正戸	産靈神社
小踊	山神社	三分一南	湯谷神社
戸ヶ谷	八幡神社	松下	八幡神社
裏	天神社	小山	三嶽神社
山口	山王神社	大井	熊野三社
正戸	諏訪神社	御前歸	八幡神社
三分一南	浅間神社	横代	第六天神社
吉田	白髭神社	三分一南	八幡神社
三分一北	八幡神社	山口	湯谷神社

三、正面内陣向かって右(五枚)

6 安政五年(一八五八)四月十日

駿河國駿東郡大平村惣鎮守

表 就 鷲頭大明神御社造 倂

安政五年戊午四月十日

大工棟梁大津半助

願主氏人中

祭主 伊豆國北條八幡宮神主横大和正藤原朝臣直虎

神主 礪右近藤原信英

從者 伊豆國宇佐美天満宮神主北山掃部源信

天皇命乃大御身平介久安介久

牧野佐渡守

名主 原專助

大將軍乎始物部乃道乎彌進尔進給

原安兵衛

天下乃大御民尔至迄茂無人事無人在志給

稻葉金之丞

名主 綾部傳吉

裏 高田下田尔蒔坐世留穀物者雨風破弊志米

安藤傳右衛門

組頭 原治右衛門

大海原与里寄来武鱒廣物鱒狭物者浦人尔依給

田邊新右衛門

辭別氏人等家内悉尔平介久穩志久家ノ業乎

諏訪鑑太郎

組頭 齋藤格右衛門

伊蘇志美務佐世給開登恐美々々毛申給須

大河内統之助

名主 安藤治兵衛

7 元祿八年（一六九五）

天滿天神

元祿八

願主

古屋藤左衛門

表 奉造立天滿天宮天下太平社内安全

亥十秋

大工

星屋六郎佐衛門

塩田七郎左衛門

裏 諸願成就皆 満足

8 安永八年（一七七九）八月吉九日 湯屋大権現

諸佛救世者住於大神通
奉勸請鎮護天滿大自在天神御守護
享保元年 年十一月吉祥日

爲悅衆生故現無量神力
駿州駿東郡大平村織部氏知善

敬白

修驗行者

阿闍梨 快瀧

南無帰命頂禮當者北野大明神権現本地垂迹

裏 和光同塵氏子守護息災延命七難即滅七福則生

豆州三嶋六反田

大工 石田長藏

當郷昌哀愍納受中心諸願決定圓滿及以法界平等利益

同 清兵衛

敬白

9 文久元年（一八六一）九月十三日 湯屋大権現

表 奉造營湯屋太神社

文久元辛酉歲

裏 三分市南氏子中

九月十三日記

▪ 文久元年（一八六一）九月十三日 湯屋大権現

大持國天王

文久元辛酉歳 大目天王

南無上行无邊行菩薩 大日天子

表 南無妙法蓮華經 南無湯屋大権現

南無淨行安立行菩薩 大月天子桓弘

九月十有三日 大增長天王

大毘沙門天王

裏 惣氏子中

四、正面内陣向かつて左（六枚）丸石二個有

▪ 享保元年（一七一六）十一月吉祥日 天満天神（勸請）

諸佛救令者住於大神通

▪ 享保八年（一七二三）正月吉廿四日 熊野権現

▪ 寛正元年（一七八九）三月十六日 天満天神

▪ 宝永二年（一八三一）十二月吉日 熊野権現

▪ 明治八年（一八七五）五月 天神社

▪ 明治八年（一八七五）五月 熊野三神社

五、左内陣（向かって右側）神祠正面 七枚

六、左内陣神祠向かつて右側 十九枚

七、左内陣神祠向かつて左側 十枚

八、右内陣（向かつて左側） 二十五枚

中央 十六枚 左 三十六枚 右 二十五枚

合計 七十七枚

石灯笼

一、獻燈 天保八年（一八三七）酉年正月吉日 原佐治平基重 五穀成就村内安全

二、御宝前 維時元治元年（一八六四）甲子八月吉日 世話人 高井 嘉兵衛

二、御宝前 維時慶應元歳（一八六五）乙丑九月吉日 世話人 高井 嘉兵衛

鳥居

明治二十二年三月

あとがき

私の祖父は、大平の太閤と云われた吉川伴右衛門（昭和十三年歿・行年九〇歳）で、子供の時からよく昔話や言い伝えなどよく聞かされた。このことなどを思い出しながら大平中を廻り古文書など調査してこれを書き抜いたものである。

前大平地区神社氏子総代連合会長 吉川 武次郎

吉川武次郎氏の調査を受けて、可能な限り文献等をあたった。主として「大平年代記」「大平道之記」等である。然しながら特に必要と思われるもののほかは、引用をことわっていない。

又、棟札は大平各社分ともほとんどが、明治八年に鷲頭神社に移されたものと思われる。詳細に就いては今後調査したい。なお、仏教関係の施設もあるが、長く神仏混合の信仰生活を続けてきた日本であってみれば割愛するにしのびず掲載した。不十分な点多々あるがご了承願いたい。

平成四年五月十五日

鷲頭神社宮司勝又清

この資料を作成後、沼津市にて「大平の棟札」として資料集がまとめられたが、棟札の読解に若干の疑義があった。平成十二年三月五・十三両日市史編集専門委員伊藤誠司氏が棟札の一部について再調査を行ったがその際改めて当社にて再撮影を行った。これにより棟札の完全読解を目指したが諸般の都合により完成をみていない。今回私の兼務社の紹介をホームページに掲載するに当たり、不十分であるが現在ある写真の一部をそのまま掲載した。

尚、棟札の写真は整理でき次第掲載する予定であり、またその読解も順次掲載するつもりであるので今暫しのご猶予をいただきたい。

平成十五年一月二十六日

鷲頭 神 社 宮 司 勝 又 清